今週の必読

評者 岸宣仁

「検察の正義」は誰のためにあるのか
『四〇〇万企業が哭いている ドキュメント検察が会社を踏み潰した日』
石塚健司

講談社　1500円+税

一読し、重い気分にとらわれた。世の中、グレーゾーンはあるものだが、この事件は「クロに近いグレー」か、「シロに近いグレー」か。

経営コンサルタントが取引先の社長らに、金融機関から融資を受けやすくするため粉飾決算を指南する。ついには大震災の被災企業を支援する国の緊急融資制度から総額一億円を超える融資を引き出す。東京地検特捜部は昨年九月、彼らを詐欺の疑いで逮捕した。

当時の新聞には「震災融資　詐欺の疑い」(朝日新聞)などの見出しが大きく躍る。直近のトピックスを起訴事実に織り込むことで、マスコミの扱いを大きくしたい検察の意図が透けて見える。

新聞社の司法担当記者を経験した著者は、このケースが立件に値するか執拗に追いかけた。その結果、この逮捕劇は「多くの中小企業が粉飾決算を余儀なくされ、良心的なコンサルタントや税理士、会計士たちはそれをサポートせざるを得なくなっているという現代社会の構造的問題を見落としてい」ると指摘。「弱い者いじめしかできなくなった特捜部」を批判し、「この捜査はいったい誰のための正義だったのか、と考えざるを得ない。特捜部のための正義でしかなかったのではないか」と厳しく問う。

大阪地検の捜査資料改竄・隠蔽など不祥事が相次ぎ、検察は組織改革を断行したはずだが、著者の畳みかける事実の追求を素直に受け取れば、その体質は変わっていないように映る。

逮捕された二人は、ともに「懲役二年四月」の実刑判決を受けた。検察の見込み捜査や歪んだ金融システムに翻弄される中小企業の実態を知るにつけ、本書の問題提起は重要だ。リーマン・ショック、三・一一と、日本経済が揺らぐなか、人間で言えば血液に当たる金融の流れに対し、検察の正義が角を矯めて牛を殺してはいないか。「四〇〇万企業が哭いている」のタイトルにあるように、日本の中小企業の存続を問うノンフィクションとして重いテーマを投げかけている。

いしづかけんじ／1961年茨城県生まれ。産経新聞入社後、司法記者クラブキャップ、社会部次長などを経て、現在は多摩支局長。著書に、「防衛フィクサー」事件を通して検察問題に迫った『特捜崩壊』がある。

きしのぶひと／1949年生まれ。経済ジャーナリスト。著書に『「電池」で負ければ日本は終わる』『ロボットが日本を救う』他がある。

ミステリーレビュー

千街晶之

東川篤哉の新作『魔法使いは完全犯罪の夢を見るか？』(文藝春秋　1400円+税)には本物の魔法使いの少女が探偵役として登場し、魔法で事件の真犯人を見抜いてしまう。東川作品にこのような非現実的要素が取り入れられたのは初めてだが、実は収録作はいずれも最初から犯人が誰かは明かされており、一見鉄壁のアリバイを持っている犯人にどのように犯行が可能かという部分は通常の本格ミステリー同様にロジカルに解決されるので、いつもの謎解きを期待している読者が裏切られることはない。狂言回しの刑事は男、その上司は女――と、大ベストセラー『謎解きはディナーのあとで』の人間関係を男女逆転させた趣もあるが、似た趣向に挑戦しつつ同じことは決してやらないという著者の矜持が窺える作品に仕上がっている。採点は★★★★。

二足歩行の有人兵器が発明された近未来を舞台とする月村了衛の「機龍警察」シリーズの第三作『機龍警察　暗黒市場』(早川書房　1900円+税)は、警視庁特捜部と契約した三人の傭兵のうち、元ロシアの警察官だったユーリが主人公である。

ユーリが警察組織に対して抱く複雑な思いは前二作でも点描されていたが、本書ではその原因となったロシアでの出来事が紹介される(ここはロシア人作家が書いたと言われても違和感がない水準)。また、現在のパートでは彼は再び警察組織を離脱することになり、過去の人間関係に搦めとられてゆく。恩讐と国際的謀略が錯綜する一大バトルのさなか、ユーリが警察官とは何かという問いへの答えに到達するクライマックスの盛り上がり具合はシリーズ中最高。今年、これを超える国産警察小説はないと言っても過言ではない傑作だ。採点は★★★★½。

●採点は、★五つを満点といたします。

W文春 2012. 10. 11　10/3発売